

機関番号：32693

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20592566

研究課題名（和文） 慢性疾患をもつ人のセルフケア能力を高める看護実践に関する研究

研究課題名（英文） Study on Nursing Practices to Improve the Self-care Agency of Patients with Chronic Illness

研究代表者

本庄 恵子（HONJO KEIKO）

日本赤十字看護大学・看護学部・准教授

研究者番号：70318872

研究成果の概要（和文）：セルフケア能力を査定する質問紙(SCAQ-30)と手順書を用いた看護実践の分析を通して、「慢性疾患をもつ人のセルフケア能力を高める看護実践」を検討した。結果、この看護実践では、看護師と患者が SCAQ を見ながら話し合う時間をもつことで、【生活の振り返り】ができていた。看護師は、疾患をもつ人の強みを見いだし、できそうなことを共に探し、生活にそった具体的な助言をしていた。この看護実践を通して、慢性疾患を持つ人の SCAQ の得点は有意に高くなっていった( $p<0.05$ )。この看護実践は、慢性疾患をもつ人のセルフケア能力を高める支援の1つであると考えられた。

研究成果の概要（英文）：“Nursing practices for patients with chronic illness to improve their self-care agency,” utilizing a Self-care Agency Questionnaire (SCAQ-30) and corresponding user’s manual, were examined. It was found that in the practices, the nurses and patients took the time to discuss the matter with each other while taking a look at the SCAQ, and through these discussions “reflections on the patient’s living” was achieved. The nurses became aware of the strengths of the patient and gave specific advice by looking together with the patients for what they are capable of doing for themselves. The practices resulted in significantly higher SCAQ scores ( $p<0.05$ ) among the patients who suffer from chronic diseases. It was considered that such nursing practices are one of the support measures enhancing the self-care agency of these patients.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：慢性看護

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：慢性病、セルフケア能力、看護

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 慢性疾患を持つ人の特徴とセルフケア・セルフケア能力

慢性疾患をもつ人の数は、年々増加傾向にある。慢性疾患は、完全に治癒することが難しく、健康状況に合わせて日々の生活をいかに調整するかが大切である。このような慢性疾患を持つ人に対する看護では、疾患をもつ人が日々の中で自らの健康に気を配り生活を調整する力、すなわち、セルフケア能力を高める支援が重要である。セルフケア能力を高めることは、慢性疾患をもつ人の再発や重症化を防ぐことのみならず、その人が望む「より良い生活」をおくることにつながると考える。しかし、セルフケア能力を高める看護実践に焦点を当てた研究は、まだあまり多くない。

### (2) セルフケア能力を評価する視点

セルフケア能力を高める看護実践を検討するにあたっては、セルフケア能力を評価する視点を明確にする必要がある。

セルフケア能力は、社会文化的な背景や健康状態の影響を受けると指摘されている。日本における慢性疾患をもつ人のセルフケア能力を評価するための指標は、日本の文化的背景の考慮や慢性疾患をもつ人びとの状態の考慮がなされているものでなくてはならない。著者は、これまでに日本における慢性疾患をもつ人びとのセルフケア能力を査定する質問紙（Self-care Agency Questionnaire, 以下、SCAQ とする）の作成に取り組んできた。SCAQ の改訂 30 項目版である SCAQ-30 は、【健康管理への関心】【健康管理方法の選択】【体調の調整】【健康管理方法の継続】【支援の獲得】の 5 構成概念、30 項目からなる質問紙である。Cronbach's  $\alpha$  は、下位尺度では 0.75 から 0.86 であり、質問紙全体では 0.93 であり、内的整合性が高く信頼性が支持されている。日本における慢性疾患をもつ人のセルフケア能力を高める看護実践の指標として、SCAQ-30 を使用することが可能であると考えた。

### (3) セルフケア能力を高める看護実践

看護実践にアセスメントツールを用いる効果や看護ケアプランの立案を看護師と患者と共に行う効果は、いくつかの文献で指摘されている。そこで、慢性疾患をもつ人と看護師が共に SCAQ-30 を用いてセルフケア能力を評価し、その中で必要なケアを提供することは、慢性疾患をもつ人のセルフケア能力を高める看護実践となるのではないかと考えた。本研究では、SCAQ-30 を看護師と患者が共に用いる「慢性疾患をもつ人のセルフケア能力を高める看護実践」の手順書を作成

し、それらを用いた支援を検討していきたい。

## 2. 研究の目的

本研究は、「慢性疾患をもつ人のセルフケア能力を高める看護実践」を構築することを目指して実施した。具体的な目的は、以下の 2 点である。

(1) SCAQ-30 を用いた「慢性疾患をもつ人のセルフケア能力を高める看護援助」の手順書を検討すること。

① SCAQ-30 の妥当性の検討

② SCAQ-30 を用いた「慢性疾患をもつ人のセルフケア能力を高める看護援助」の手順書の作成と妥当性の検討

(2) SCAQ-30 と手順書を用いた看護実践の分析を通して、「慢性疾患をもつ人のセルフケア能力を高める看護実践」を明らかにすること。

## 3. 研究の方法

(1) SCAQ-30 を用いた「慢性疾患をもつ人のセルフケア能力を高める看護実践」の手順書の作成と妥当性の検討

### ① 手順書の内容

SCAQ-30 を使用し「慢性疾患をもつ人のセルフケア能力を高める看護実践」を実施してもらうための手順書には、【SCAQ の哲学的な前提（セルフケア・セルフケア能力の理念）】、【具体的な使用方法】、【よくある質問についての回答】という内容を含めた。

【SCAQ の哲学的な前提（セルフケア・セルフケア能力の理念）】では、「セルフケアは、その人がどうありたいかに基づく行動」人は潜在的な力をもつ」というような、主体的な取り組みとしてのセルフケアの前提となる考え方を解説している。【具体的な使用方法】は、3つのステップを含んでいる。最初のステップは、慢性疾患をもつ人に SCAQ-30 に回答してもらうことである。2つ目のステップでは、看護師が SCAQ-30 の得点傾向を概観し、疾患をもつ人のセルフケア能力の特徴を「強み（高い得点）」と「弱み（低い得点）」から捉える。総得点と構成概念毎の得点、さらには、各質問項目の得点を検討することで、慢性疾患をもつ人の持ちうる力が発揮されている部分や、支援が必要そうな部分を見いだすことが可能となる。3つ目のステップでは、看護師が患者と話し合う時間を持ち、疾患をもつ人が「どんな生活を送りたいと思っているのか」を理解しながら、疾患をもつ人の生活を共に振り返り、セルフケア能力を高めるために何が必要かを共に考え、それを看護計画に生かすのである。

## ②研究参加者

研究協力への同意を得たセルフケア能力を高める看護実践に興味・関心のある看護師および研究者を対象とした。

## ③データ収集方法

SCAQ-30 と手順書を提示した上で、グループ・インタビュー、もしくは、個別面接調査を実施した。

## ④データ分析方法

インタビューデータを逐語録にして、SCAQ-30、および、使用手順書の妥当性や課題について質的に分析した。

## ⑤倫理的配慮

日本赤十字看護大学研究倫理審査委員会より承認を得て（承認番号 2008-47）、研究を実施した。研究参加者に対しては、研究の目的や方法、研究への参加・協力の拒否権、話したくない内容は話さなくてもよいこと、本研究の目的以外にデータを用いないこと、プライバシーや個人情報の保護方法等を口頭および文書にて説明した。書面にて同意の意思を確認できた人を、対象とした。尚、グループ・インタビューへの参加の場合でも、いつでも途中中断可能であることを伝え、自由意思を尊重した。

(2) SCAQ-30 と手順書を用いた「慢性疾患をもつ人のセルフケア能力を高める看護実践」の検討

「慢性疾患をもつ人々のセルフケア能力を高める看護実践」の手順書に基づき、看護実践を展開してもらい、その効果を検討した。看護実践には、SCAQ-30 を看護師と患者が共に使用するという内容が含まれている。

### ① セルフケア能力を高める看護実践：セルフケア能力の得点の変化からの検討

「慢性疾患をもつ人々のセルフケア能力を高める看護実践」の手順書に基づき、SCAQ-30 を使用した看護実践を展開してもらい、SCAQ-30 を返送してもらうという、質問紙調査を実施した。調査協力を依頼し、同意が得られた 2 施設で調査を実施した。1 施設あたり 20～50 組、合計 100 組の協力者を得ることを目標に研究依頼をした。質問紙調査として、SCAQ-30 を用いた評価を、1 回目：看護実践初回、2 回目：初回から 2 週間～1 ヶ月経過後、3 回目：初回から 3 ヶ月程度経過後、のうち、協力可能な回数の実施を依頼した。分析は、SCAQ-30 の得点（全体、構成概念毎）の有意差を対応のある t 検定を用いて分析し、セルフケア能力の変化を検討した。統計処理には、PASW Statistics を用いた。

## ② セルフケア能力を高める看護実践の内容の検討

上記①の質問紙調査で、「慢性疾患をもつ人々のセルフケア能力を高める看護実践」の手順書をもとに実施した実践内容について、同意が得られた看護師には、自由記載用紙にその内容を記載してもらい返送してもらった。さらに、同意が得られた看護師を対象として面接調査を実施し、具体的な看護実践内容などについて語ってもらった。

自由記載用紙の分析は、記載された内容を質的に分析した。面接調査の分析は、インタビュー内容を逐語録に起こし、内容を質的に分析した。

## ③ 倫理的配慮

この研究は、日本赤十字看護大学の研究倫理審査委員会を受けて、実施した（承認番号 2009-70）。質問紙調査は、調査目的と、協力の有無は自由意思によるということなどを文書で説明し、看護師と患者の両者の同意が得られた時のみに、協力可能な回数を実施してもらうこととした。質問紙の返送をもって同意が得られたとみなした。質問紙の回答は自由意思を尊重し、途中で回答をやめることの自由を保証した。また、面接調査では、研究目的や参加は自由意思によるものであること、途中中断が可能であることを伝え、文書にて同意の意思が確認できたのみを対象とした。

## 4. 研究成果

(1) SCAQ-30 を用いた「慢性疾患をもつ人のセルフケア能力を高める看護実践」の手順書の作成と妥当性の検討

### ①研究参加者の概要

研究協力への同意を得たセルフケア能力を高める看護実践に興味・関心のある看護師および研究者の 11 名を対象とした。

グループ・インタビューは、1 グループ 7 名に対して 1 回、4 名に対して 1 回実施した（内、1 名は 2 回参加であった）。グループ・インタビュー設定日時に都合がつかない 1 名に対しては、個別面接を実施した。グループ・インタビューに要した時間は 79 分～101 分で、平均 90 分であった。個別面接に要した時間は、29 分であった。

### ② SCAQ-30 の洗練

インタビューでは、質問紙の名称や構成概念の名称を、定義は変えずに、呼び方をもつ慢性疾患を持つ人にもなじみやすい平易な表現にすると良いという意見がだされた。そこで、質問紙の名称を、「SCAQ」と英語の短縮版標記にして、呼び名も SCAQ（エス・シー・エー・キュー）とすることとした。

構成概念も定義を変えずに、呼び方を平易にすることとした。【健康管理への関心】を【健康に関心を向ける能力】、【健康管理方法の選択】を【選択する能力】、【体調の調整】を【体調を整える能力】、【健康管理方法の継続】を【生活の中で続ける能力】、【支援の獲得】を【支援してくれる人をもつ能力】と平易な表記に変更をした。

さらに、SCAQ-30 は、一人ひとりの変化を追う質問紙で、1年2年という長い年月を追う質問紙であることから、記載日は、「月日」だけではなく「年月日」の記載ができるように、「年」を追加することとした。

### ③ SCAQ-30 の内容妥当性と有用性

参加者は、SCAQ-30 は「セルフケア能力を測る具体的な項目がわかる」と指摘し、セルフケア能力を査定する上で必要とされる内容が網羅されていることが示唆された。また、SCAQ-30 が構成概念ごとに並んでいることについて「ナースにとっても患者にとっても、得点の傾向がひと目でわかり、使用しやすい」といい、実践に活用しやすい有用なものであることが示唆された。

### ④ 手順書の妥当性と有用性

哲学的な理念や、具体的な使用手順や、よくある質問が記載された使用手順書の内容妥当性としては、「内容がわかりやすい」「使用手順が網羅されている」と妥当性が支持された。

この手順書を活用することで、慢性疾患を持つ人に SCAQ を使用するときの「看護師間の違いが少なくなる」「SCAQ を、ただ患者に回答してもらいカルテに挟むだけというのではなく、患者のセルフケア能力を高める援助に生かせよう」という意見がだされ、有用性が支持された。

### ⑤ SCAQ と手順書を活用した看護実践

「その人に向き合い話を聞き、ケアにつながるができる」「看護師と患者が一緒に生活を振り返るツールになる」「看護師自身が SCAQ を使用することで、成長する」といった意見が出された。SCAQ-30 と手順書を使用した「慢性疾患を持つ人のセルフケア能力を高める看護実践」は、患者のセルフケア能力を高めるという看護の質の向上や、看護師自身の成長につながることを示唆された。

### (2) SCAQ-30 と手順書を用いた「慢性疾患をもつ人のセルフケア能力を高める看護実践」の検討

#### ① セルフケア能力を高める看護実践：セルフケア能力の得点の変化からの検討 質問紙調査へ回答した看護師と患者は、10

組であった。SCAQ-30 の回答回数は、1 回が 3 組、2 回が 6 組、3 回が 1 組であった。患者の年齢は 32 才から 81 才までにわたり、平均 62.6 才で、全員男性であった。疾患は、脳神経疾患 7 名、高血圧 5 名、糖尿病 3 名、腎症 3 名（重複あり）であった。看護師の経験年数は、17 年～26 年にわたり平均 20 年であった。看護師は、全員女性であった。

SCAQ-30 に 2 回の回答があった 7 組について、1 回目と 2 回目の得点の変化を分析した。7 組の受診している主な診療科は、脳神経系 4 組、腎臓系 1 組、循環器系 2 組であった。

総得点の平均は、1 回目が 101.7 点、2 回目が 135.4 点であり、2 回目が有意に高くなっていた ( $p < 0.05$ )。構成概念ごとに平均値の変化をみると、【健康に関心を向ける能力】は 1 回目が 18.6 点で 2 回目が 24 点、【選択する能力】は 1 回目が 15.6 点で 2 回目が 22.4 点、【体調を整える能力】は 1 回目が 19.9 点で 2 回目が 27.3 点、【生活の中で続ける能力】は 1 回目が 21.3 点で 2 回目が 29.1 点、【支援してくれる人をもつ能力】は 1 回目が 21.3 点で 2 回目が 32.6 点と、すべてが有意に高くなっていた ( $p < 0.05$ )。

### ② セルフケア能力を高める看護実践の内容の検討

看護実践に関する自由記載は、記入して返送があった 10 ケースを対象とした。10 ケースが SCAQ-30 と手順書を活用した看護実践に要した時間は、1 回目：平均 48 分、2 回目：平均 35 分であり、40 分程度の時間を要していた。この中で、面接調査に協力してくれた看護師は 4 名で、経験年数は 17 年～26 年にわたり平均 20 年であった。インタビュー時間は、24 分～49 分にわたり平均 25 分であった。

SCAQ-30 と手順書を用いた看護実践の特徴として、SCAQ-30 の回答を見ながら、看護師と患者が話し合う中で、患者が大切にしていることや、難しさを感じていることを、「生活エピソード」として確認していた。このように生活エピソードを確認しながら、看護師が患者とともに「生活の振り返り」を行うことが、セルフケア能力を高めることにつながっていることが明らかになった。そして、「慢性疾患をもつ人のセルフケア能力を高める看護実践」として、【強みを見だし、必要なことを伝える】【生活にそった具体的な助言】【できそうなことを共に探す】といった特徴が明らかとなった。また、「セルフケア能力を高める看護実践」には、【タイミングの見極め】【安心して話せる雰囲気】【的を絞る】という看護師のスキルが必要とされることが明らかになった。

### ③ 今後の課題

SCAQ-30 と手順書を用いた「慢性疾患をもつ人のセルフケア能力を高める看護実践」は、SCAQ の得点を有意に高くしており、セルフケア能力を高める実践となることが示唆された。この実践には、40 分程度の時間がかかることが明らかとなり、この時間を日々の実践の中でいかに確保するかが課題である。しかし、この 40 分という時間が慢性疾患をもつ人のセルフケア能力を高めるのであれば、この時間を入院期間や外来通院時に見いだしていくことは、非常に重要であり、価値のあることと考える。

今後は、SCAQ-30 と手順書を用いた「慢性疾患をもつ人のセルフケア能力を高める看護実践」の事例数をさらにふやし、疾患の種類などの特徴もふまえた検討をしていきたいと考える。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 7 件)

- ① 本庄恵子(2010)「セルフケア・セルフケア能力を高めるケア技術」臨床看護臨時増刊号、査読無、36(2)、1557-1562.
- ② 本庄恵子(2010)「セルフケア能力を査定する質問紙(SCAQ)の活用方法」、Nursing Today、査読無、25(1)、21-25.
- ③ 本庄恵子(2010)「セルフケア能力を評価する意味」、Nursing Today、査読無、25(1)、18-20.
- ④ 本庄恵子・野月千春(2010)「慢性疾患をもつ患者のセルフケア能力を高める看護計画 -SCAQを活用し共につくる看護計画-」看護実践の科学、査読無、35(8)、6-11.
- ⑤ 野月千春・酒井礼子・大内理恵・本庄恵子・末永真由美・本館教子(2010)「セルフケア能力の評価と優れた看護実践の検討 -SCAQ導入と継続の取り組み-」日本看護技術学会誌、査読無、9(1)、55-57.
- ⑥ 野月千春・酒井礼子・本庄恵子・末永真由美・本館教子(2010)「セルフケア能力の評価と優れた看護実践の検討」日本看護技術学会誌、査読無、8(1)、47-48.
- ⑦ 本庄恵子(2008)「慢性疾患をもつ人のセルフケア能力を高める看護実践の検討 -セルフケア能力を査定する質問紙の作成を通して」、日本慢性看護学会誌、査読無、2(1)、20-22.

[学会発表] (計 7 件)

- ① Keiko Honjo, et.al.(2011). “ The Validity of the Self-Care Agency Questionnaire for Chronically Ill

Patients in Japan”, The 2<sup>nd</sup> International Conference on Prevention & Management of Chronic Conditions and The 11th World Congress of Self-care Deficit Nursing Theory. 2011年3月23日、タイ・バンコク.

- ② 本庄恵子、他 5 名 (2010)「慢性疾患をもつ人のセルフケア能力を高める看護支援技術に関する研究 -SCAQと使用手順書を用いた看護支援の分析を通して-」第 9 回日本看護技術学会学術集会、2010 年 10 月 24 日発表、名古屋市.
- ③ 野月千春・本庄恵子、他 4 名(2010)「セルフケア能力の評価と優れた看護実践の検討 -セルフケアをいかに支えるか」第 9 回日本看護技術学会学術集会、2010 年 10 月 23 日発表、名古屋市.
- ④ 本庄恵子(2010)「慢性疾患をもつ人のセルフケア能力を高める看護支援 -SCAQを用いた看護支援の試み」第 4 回日本慢性看護学会学術集会、2010 年 6 月 27 日発表、札幌市.
- ⑤ 本庄恵子 (2009)「セルフケア能力を査定する質問紙改訂版の洗練と使用手順書の妥当性の検討」第 8 回日本看護技術学会学術集会、2009 年 9 月 27 日、旭川市.
- ⑥ 野月千春・本庄恵子、他 4 名(2009)「セルフケア能力の評価と優れた看護実践の検討 -SCAQ導入と継続の取り組み-」第 8 回日本看護技術学会学術集会、2009 年 9 月 27 日、旭川市.
- ⑦ 野月千春・本庄恵子、他 3 名(2008)「セルフケア能力の評価と優れた看護実践の検討」第 7 回日本看護技術学会学術集会、2008 年 9 月 21 日、青森県.

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

ホームページ等  
無し

### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

本庄 恵子 ( HONJO KEIKO )

日本赤十字看護大学・看護学部・准教授

研究者番号：70318872

(2) 研究分担者

無し

(3)連携研究者

無し

(4)研究協力者

野月 千春 (NOZUKI CHIHARU)  
東京厚生年金病院・看護部・副看護部長  
末永 真由美 (SUENAGA MAYUMI)  
順天堂大学・保健看護学部・講師  
本舘 教子 (MOTODATE NORIKO)  
聖マリアンナ医科大学病院・看護部・副看護部長  
酒井 礼子 (SAKAI REIKO)  
東京厚生年金病院・看護部・師長  
大内 理恵 (OOUCHI RIE)  
東京厚生年金病院・看護部・主任